

つ、くり返し運んだ。それを私たちは艦上に一人ずつ釣り上げる。暗い海中の作業は寒風の中で夜半まで続けられた。艦の中の女子の用便をバケツでつり上げて海中に捨てる。そのうち艦内で出産もあり、艦の内も外もたいへんな騒ぎであった。

こうして徹夜で行われた救助作業が終わり、上海港に引き返した。私は全快した筈のマラリアが再発したので、しばらく休養した後、豊栄丸に乗り換えて帰国することができた。

## 身重の引揚げ

群馬県 金子イチ

私が終戦を知ったのは八月二十日でした。当時長男が胃腸を悪くして、天津陸軍病院に入院していました。病院側は患者の身を気づかっていたことでした。正式に発表があったのは二十五日でした。異国で敗戦となつては実に哀しいことです。夢にも思っていなかったことが起

こつてしまったのです。なんの心構えもなく、とつぜんでただ驚くばかりでした。病院で子どもと泣き泣き四、五日過ごしました。連絡しようにもどこへしてよいかわかりません。看護婦さんが目を赤くして走りまわっておりました。

それから三日目、主人が四、五人の人達と迎えにきてくれました。なにかあつてはと、いろいろ気づばりしてくれ、やっとわが家に着きました。

隣組の人達もぶじに帰れて良かったと喜んでくれました。二、三日たつと、米軍の飛行機が屋根すれすれに低空飛行して、たいへんこわい思いをしました。

婦女子は何をされるかわかりません。一步も外には出られません。そうこうしているうちに、九月末、引揚げ命令が出まして、天津野戦倉庫に収容されることになりました。住みなれたわが家を無一文で離れるとなると、女にとってはなんともしのびがたい思いでした。はるばる日本から持ってきた嫁入り道具、遠い祖国から母が子ども達に送ってくれた着物、たいせつにしていたお金、数々の大事な品物、心中は複雑でした。

いふなれば、私にとっては第二の故郷だったので。三十三歳で嫁ぎ、西も東もわからず、買物に行くにも手真似、足真似やと幾らか話が中国人とできるようなになった矢先、以前は優しかった中国人が日本が敗戦となった途端の応対。

こんな日々が幾日か続き、いよいよ収容所に行きました。さあ収容されるとなるとたいへんです。五人ほどの人達の共同生活で、天津は雪も雨も降らないけれども凍りつく寒さ、病氣の子どもを抱えて、妊娠五か月の私は、疲労で四十五日も寝こんでしまいました。皆さん親切な人ばかりで、子どものことを良く見てくれました。

敷地二万坪、倉庫六十棟、広い庭には油一斗缶が山と積まれているではありませんか。内地の人も、私達外地の人も毎日配給の生活をしてきたのにと、眺めては口々にこんな戦争をしてと、馬鹿馬鹿しいの連発、一つとして持ち帰ることはできず、身も心も疲れはてています。突然明日（十二月一日）五時、日本への引揚げ命令ができました。

友人とも別れ別れ、米軍に裸にされんばかりの検閲が

あり、寒さが厳しく、病氣の子どもと五か月の身体を引きずりながら、また主人は足を悪くして、少しばかりの食糧と着替えを持っていました。

全員検閲が終わり、貨車に乗せられ、無事塘姑港に着きました。途中中国人に石を投げられましたけれど、何事もありませんでした。塘姑港からいよいよ出発です。

裸一貫で日本に帰る悲しみと、異国で何年か暮らした友人と買物に行った日本租界、イタリア租界、初めてみた天津の駅、ここには、日本軍が襲撃されて戦死なされた方の忠魂碑があります。

二十四区の増尾利雄さんのお兄さんの名もありました。日本をたつとき、その話を聞いたので駅を出ると、第一番にその碑の前に立ちました。その名前をみただけで、懐かしさで一杯でした。

あの碑はどうなっているのだろう、などなど感無量でした。船は五千人の人で身動きできません。病氣の子どもは下痢がひどく、飯盆いげんを便器代わりにしてきました。五、六日たって博多港に着きました。中国を出るとき千円渡してきましたのに、博多に着いたら三百八十円

しか渡されません。この金でどうして暮らしていけるだろうと思っただけが先に生まれません。それから私の暮らしは長い戦争が始まったのです。